

平成 24 年度 第 2 回文化芸術に関する意見交換会

- 1 日 時 平成 24 年 11 月 1 日（木）午 10 時 00 分から 11 時 50 分
- 2 会 場 さいたま市役所 議会棟 2 階 第 7 委員会室
- 3 出席者
 - (1) 委員（11 名）

五十嵐健一、石上城行、大久保佐貴玖、おかべりか、齊藤茂、柴原早苗、花田陽介、三須康男、宮本智子、村木益実、山口聖子（以上 11 名）
（欠席：井藤仁、山田登美男）
 - (2) 事務局（7 名）

スポーツ文化部	野間部長
文化振興課	中村課長、織田課長補佐、鈴木主任、横溝主任
株式会社丹青研究所	大木、田上
- 4 公開・非公開の別 公 開
- 5 傍聴人の数 3 人
- 6 内 容
 - (1) 開会
 - (2) スポーツ文化部長挨拶
 - (3) 委員変更の報告
竹村委員の辞任について説明し、新任の花田委員を紹介
 - (4) 報告
 - ・アンケート調査結果
 - (5) 意見交換
 - ・文化芸術都市創造に向けたシンボル事業のあり方
 - (6) その他
 - ・次回の会議日程について説明。
 - (7) 閉会

会議録

<報告 [アンケート調査結果] >

石上委員長　それでは、次第「3 報告 アンケート調査結果」について、事務局より説明をお願いします。

事務局　資料説明

石上委員長　今の説明について疑問などありましたら、ご意見をいただきたいと思います。何かありますか。

齊藤委員　詳細な調査と結論を引き出していただき、よく分かりました。これをふまえて我々は考えていくのがよいでしょう。

柴原委員　年代別の他に、未婚、子育てなどの分類はないのでしょうか。

事務局　今のところ、そのような分析は行っていません。

花田委員　市民意識調査の施策に対する満足度について、1位の項目は何ですか。

事務局　「ゴミの適正な処理／リサイクルの推進」です。

三須委員　市民意識調査の施策に対する満足度について、ソフトとハードで分けて分析していますか。一緒にした設問なのですか。

事務局　市民意識調査では、こうした設問になっているようです。

<意見交換 [文化芸術都市創造に向けたシンボル事業のあり方] >

石上委員長　それでは、次第「4 意見交換 文化芸術都市創造に向けたシンボル事業のあり方」について、事務局より説明をお願いします。

事務局　資料説明

石上委員長　議論の前に、本会議の位置づけをもう一度確認しておきたいと思います。本会は意見交換会であり、あくまでも多様な意見を出していただき、結論は基本的に出さないということですので、具体的な事業に対する提案があってもいいですし、あり方的な提案があってもいいと思います。その辺は全く自由に出していただければいいと思っておりますので、よろしくをお願いします。

では、ご意見がある方は挙手をお願いしようかと思えます。ご意見のある方いらっしゃいますか。

大久保委員　まず、先ほどのアンケートの集計結果の7ページについて、参考というか、感じたことですが、2. さいたま市を代表する文化芸術資源として、盆栽、漫画、人形、鉄道といったさいたま市の魅力ある資源や伝統的な文化というものに対する鑑賞とか参

加という方向性と同時に、もう一つ強く印象に残ったのが、同時に一流の芸術鑑賞の機会が求められているということです。さいたま市における文化芸術振興計画ですので、やはり文化、伝統的なさいたま市のアンデンティティーを確立するための文化の創造というか、促進という方向性も一つ非常に大切なことだと思いますが、同時に市民が簡単に参加できるような一流芸術の鑑賞機会が、これまで意識されてきた以上にニーズとして高いのではないかと思います。利便性が高いということで、さいたま市から上野や東京まで行ってしまったりするのは簡単ですけれども、逆に言えば、上野に行ってしまう人たちをこちらまで呼び寄せることができる、首都圏からの集客が可能であるということで、さいたま市で一流の芸術鑑賞の場を設けるといって、魅力あるさいたま市の伝統文化を育てるといってとの二つの方向性で、この計画を考えていくことが必要ではないかということ強く印象づけられました。

石上委員長 ありがとうございます。いかがでしょうか。

宮本委員 やはりこのアンケート結果を見まして感じたのは、これだけの文化資源があるにもかかわらず、それらの認知が低いというのは非常に残念なことです。参加したい分野で「音楽」が挙げられていますが、例えばここで認知度が高い鉄道博物館で、市民が参加しやすいようなコンサートを開くなどして、認知度を高めるということが一つ必要だと思います。

それからもう一つ、今、銀座に自治体のアンテナショップがありますが、さいたま市は出していませんね。

事務局 銀座の方には設置しておりませんが、先日、丸の内ビルディングで、さいたま市のPR活動をやりました。

宮本委員 例えばアンテナショップみたいなものを設けて、そこでいろんなイベントをやってもいい。宝の持ち腐れかなという感じがしました。

石上委員長 ありがとうございます。

山口委員 このアンケート結果に直接関係あるか分からないのですが、浜松市では、浜松国際ピアノコンクールを1991年から始めています。市長が委員長を務める実行委員会を設置して開催しています。先ほどの全国に発信していくシンボル事業の話がありましたが、世界に発信するという視点に立ってみますと、浜松市はそれを非常に上手くなし遂げている実績を持っています。その国際コンクールというのは1991年から始まり、浜松市は楽器のまちなので、もちろんスポンサーもいろいろついていて、3年おきに開催しています。どう世界に発信していくかという一つの例を挙げますと、審査員の方たちが世界中から集まってくる。ここ何年かは中村紘子さんが審査員長をなさっていたのですが、2000年のときに2位になった上原彩子さんという日本人のピアニストは、その後、チャイコフスキーで優勝しました。それから2003年に優勝したブレハッチというポーランドのピアニストも2005年のショパンコンクールで優勝しており、世界のコンクールに行く登竜門となっている。ついこの間も、ロシアのピアニストやヨーロッパの方たちが「浜松はすごいね」とおっしゃっているのを聞き、まさに世界に発信していることと、そのピアニストたちが活躍している実績を持ってい

るということも、一つの市としてすごいことだと思います。

さいたま芸術劇場には10年で100人のピアニストを聴く「ピアニスト100」という企画があり、その優勝者がさいたま市に何人もいらっしやって、実際に演奏しているのです。2003年に優勝したブレハッチは2月にさいたま芸術劇場で演奏会をするのですが、うっかりしていたら空席がもう何席しかなく、満杯状態でした。ということは、このアンケート結果の「一流の芸術の鑑賞」というのは、すでにそういう実態も、さいたま市ではあるということだと思いますし、世界的に見ても全国的に見ても、クオリティが高いところまで持っていくことができると思います。浜松市では、東京の鍛冶橋から浜松の会場までの往復バスを走らせたり、当然、浜松市に何日間か宿泊しなければいけないので、その間に美術館などを案内するといったこともしていた。やはり、一体としての文化を知っていただくためには、何か大きなものが必要であると感じています。

石上委員長　やはり地場産業とつながっているということですね。ありがとうございます。ほかに何か。

柴原委員　シンボル事業の開催にあたって大切なことは、恐らくシンプルでわかりやすく、強烈なコアの部分が必要だと思うのですね。例えば同じ政令指定都市で仙台を考えてみると、「場所」と「人物」と「食べ物」と「ゆるキャラ」という4つの観点から見た際に、青葉城があり、伊達政宗があり、牛タンがあり、ゆるキャラもむすび丸という、たしか伊達政宗のキャラクターがある。同じことをさいたま市で考えると、盆栽もあるし、鉄道博物館もあるしと、ばらばらで、そこそこ認知度の高いものが複数ある。さっき宮本委員から「宝の持ち腐れ」という話がありましたが、まさにいいものはあるけれども、そこそこという感じではないか。はて、歴史的人物はだれか、食べ物はB級グルメがあるけれども、具体的に何だろう。ゆるキャラも、つなが竜ヌウですよね。ということで、一つを思い浮かべると、全部つながっていくという一貫性のあるシンプルなものの方が、シンボル事業の開催をする際にも、認知度を高め、理解してもらえるのではないかなと思いました。

齊藤委員　認知度は低いのですかね。鉄道博物館は、3週間ぐらい前に、NHKで、ニュースで取り上げ、毎日やっている昼間のワイド番組でも取り上げ、1週間のうちに鉄道博物館は2回もNHKに出た。あれは恐らく両方とも全国放送なので、全国区なのです。つまりNHKの記者にしてもディレクターにしても、全体を眺めて「取り上げたい」と思うということは、鉄道博物館はそれだけ発信力を持っているのです。わざわざ、さいたま市大宮区と表示していましたが、大宮の駅のところにあるのだなど、それでもう十分認知されている。それから、岩槻の人形というの、結構、全国区ではないかなと思っているのです。これらさいたま市の文化的・伝統的な資源というのは、鉄道博物館は新しいのですけれども、どちらにしてもそれなりの認知度はもう持っている、この克明な調査やこの前いただいた資料も含めて、文化活動をするハードというのはすごいですね。このさいたま市の中に、個別に公民館などの施設の多さというのは驚くべきものだと思います。

この間、埼玉会館で大島文子さんのライチタイムコンサートを拝聴しました。よくぞ大島文子さんを連れてきたなど、つまりあのような管楽器に目を向けるということはほとんどないものですから。確かに、ウィークデーの昼間ですから、客席に若い人

はいませんでした。だけど、年齢的に私以上くらいの方たちが、非常にいい感じで、客席は8割ぐらい埋まっていました。こういうコンサートを実施していくなら、日常の文化活動としては結構いい線をやっているなど。ただ惜しむらくは、中堅層が東京などに通っているという点で、ちょっとイメージが重なりにくいのかなと思います。ただし、かなりの活動は行われている。

皆さんのお話がこれからもっと盛り上がっていくのでしょうかけれども、先を言うと、柴原さんの話のように、鉄道も、盆栽も、人形も、それなりの知名度は確立しているのだけれども、もう一つコアになるものがある、人が行き交う、東京から人を呼び込めるようなコアになる何かを、今後、毎年、実施していく。それには予算が必要です。山口さんがおっしゃった浜松のコンクールにどれくらい予算がかかっているか。それから、あれは市役所のある一課が、年間を通じて携わっているのです。そのくらいやらなければ、できないのです。国際音楽コンクールですから、おそらく10人程度の審査員のうち、半数以上は外国の審査員を入れなければいけない。この人たちと交渉して、呼ぶ。それから、業績を上げる若い演奏家は放っておいては来てくれません。声をかけなければ、だめなのです。そういうことが、年間を通じて行われているということです。中村紘子さんを引き込んだのは、彼女は他のコンクールの審査員でもありますから、その場で目利きができる。そういう場に打って出るには、そういう組織を確立し、相当の覚悟を持たないといけない。われわれは勝手に話をしていますが、市役所の皆さんは、そういう予算を配分して、コア事業を実施していく心構えが必要ですし、今後、議会にも説明していくことが必要だと思います。アイデアはいろいろ出てくると思いますが、それは相当の部分占める。また、さいたま芸術劇場もすばらしい劇場で、認知度が低いのは残念ですが、あの劇場が挙げている実績は、例えばダンスでは世界の最先端のものを相当呼んでいる。ただ、あの場所にあるということが、ちょっと認知度を低くしているのかなと思います。

三須委員

ダンスは、今度、イスラエルの団体を誘致して、なかなかふだん接することのできないものをやります。ちょっと敷居が高過ぎるというのはあるかもしれませんが、そこは、県と市の役割分担という話も出てくるかもしれませんが、県は県の財団としてできることは協力していきたいと思っています。

先ほど大久保委員からもあったように、今後の考える方向性として、コアになる一流の芸術を持ってくるというのも必要だし、地に足のついた伝統的なものと、2つの方向でやっていこうという視点は非常に重要だと思いますが、今回、文化芸術都市の創造ということがキーワードになってくるという意味では、やはり本当に住民、市民の方々がふだんやっていることの発表の機会をもっと増やしてあげるとか、あるいは活動によってお金が回っていく仕組みをつくるか、経済を活性化していくことなどにより人を呼ぶということも必要で、単発のシンボル事業になってはいけないということだと思います。柴原委員もおっしゃっていましたが、つなぐという意味で、既存の文化施設をつないでいく、例えば盆栽美術館と漫画会館というのはいろいろな規制があって、新しいアイデアをやろうとしても実現しない部分があるのであれば、そこを何とか実現するための方法を市民から提案してもらおうとか、何か形、仕組みが変わるようなつなぐ方法を考えていけたらなと思っています。文化芸術都市という意味では、市民の活動がこのアンケートでなかなか見えてこないのは、実は散らばってしまっているからではないか。今ちょうど市民文化祭として、様々なイベントをやっていますが、期間も少し長めだし、いろいろな会場で行われています。例えば条例記念

事業という意味で期間を1週間に区切って、それぞれの地域の核になるセンターで行う公募企画に合わせて、中心事業を据え、この1週間はどこかに行けば何かしら芸術の匂いするような集中期間とするというのも一つあると思います。もちろん中心になるインパクトのあるものは必要だと思いますが、地に足のついた形での活動も大事な視点かなと思いました。

おかべ委員 先ほどシンボル事業のことでたくさん例を挙げていただきましたが、川崎、横浜、新潟、神戸、岡山、福岡と、全部、港を持っています。ですから、世界に発信する以前に、発信なんていう言葉がある以前に、名もない人間と名もない人間が交流していたわけなのです。そういう土地の持っている強いものというのは、政治の体制とか、元号が変わったぐらいでは変わらない、もっとDNAとして流れているものがあるのです。それから考えたとき、さいたま市は何を持っているのか。ちょっと偉そうに言いますが、もっと深いところからきた感じ、私たちが土地の精と交流してきた何千年を考えたときに、さいたま市というのは北と結びついている、中央関東と結びついている不思議な流れがあって、それはもしかすると、アイヌとも、あるいは塩の道で日本海ともつながっているかもしれない。今まで私が学校で教わってきた、たかだか昭和の社会の授業みたいなことを一旦頭から外して、見つけてくるものが多いのではないかと思います。そういうことは、横浜の人、新潟の人、神戸の人、岡山、福岡、浜松の方々は、みんなやってきたと思うのです。そうして見つけたものがシンボル事業の底の底のコアになるものだと思うので、鉄道は大事ですが、もっと深いところに根っこを下ろして探っていって見つかったものが、もしかすると宝になるかもしれないなと思いました。

この前、柴原さんがおっしゃった浦和の祭について、情報がばらばらで、決まったものがないという意見に対してですが、北区の飛鳥山博物館が発行している『北区文化財ガイドブック』というのがあります。1冊 400円で、北区の各地域に関するお寺や歴史について、住所から全部載っている。こういう何でもガイドブックみたいなものがさいたま市にほしいと思いますが、今、私が一番頼りにしているのが、実はこのペラペラの散歩マップです。だから、もう少し役に立つ、使い倒せる1冊、しかも、子育て世代の人が多いわけだから、子供に関するお役立ち情報も入れたもので、みんながこの存在を知っていて、400円ぐらいで買える、そして改訂版を出せばずっと続いていける、こういうお役立ちブックがあったらありがたいと思います。

村木委員 今のおかべ委員の意見に関連してですが、さいたま市は交通の利便性が高いので、さいたま市に根づいていない人が住んでいるような気がするのです。ましてや、さいたま市が合併をしたときに、大宮市、浦和市、与野市、岩槻市があった。私は今、浦和在住ですが、岩槻やさいたま芸術劇場は遠い印象。さいたまスーパーアリーナは行きやすい印象で、鉄道博物館も勤務地が大宮なので近い印象がある。でも、私の出身は青森で、18歳からこちらに住んでいますが、さいたま市というよりも、浦和市で育ったイメージがすごく強い。盆栽美術館と言われても、実は行ったことがありません。その中でこういうアンケートを取ったときに、これが果して本当にDNAを持ったさいたま市の人たちのアンケートなのだろうかと感じる部分もある。一流の芸術の鑑賞というのも、有料か無料かで意識が相当変わってくると思う。多分、近くて、しかも無料でやっているなら行ってもいいかと思うのですが、例えば8,500円と言われたら無理して行かないというふうになってしまう。住んでいる人の意識が、振興事業をや

るにあたって難しいところではあるのかなと思います。あと、施設が近いようで離れているというのがあるかと思います。

先ほどの浜松市の話についてですが、浜松市は、さいたま市よりも小さい面積で、東京から行くとなると2~3日かけて宿泊をしないといけない。さいたま市だったら、きっと東京に泊まってしまいます。6時に終わったら、東京に戻って東京で酒を飲んで、翌日、時間があったら都内のどこかを見るというのが多いと思う。だから、さいたま市に泊めてまで何かさせなければいけないということを考えていかなど、地域の活性化はむずかしいと感じます。

石上委員長　　そうですね。さいたま市に留め置くのは、なかなかむずかしいですよ。

村木委員　　補足ですが、鉄道博物館と音楽の話がありました。今、一緒に企画をさせてもらっていて、「スギテツの GRAND NACK RAILROAD」という番組をやっているのですが、バイオリンとピアノで鉄道のベルの音だとかをやっているアーティストがいて、その公開録音をやらせてほしいというお願いを鉄道博物館にしています。

齊藤委員　　さいたま市は何人ぐらい泊まれるのですか。多分、少ないですね。

石上委員長　　イベントが重なると、すぐホテルが取れなくなってしまいます。スーパーアリーナで大きなイベントをやっているときに学会をやろうとすると、みんな取れない。

五十嵐委員　　埼玉県にはいろいろ資源がありますが、そういったものを子供のときから知るきっかけとして親しんできたものの中に「さいたま郷土かるた」というのがあります。この地域にはどのようなものが有名であるとか、楽しみながら親しんできました。21世紀になってから「彩の国 21 世紀郷土かるた」に変わって、若田光一さんやスーパーアリーナなどが出てきたと思いますけれども、そういったものを通して、さいたま市の資源と親しんだらよいのではないかと。

石上委員長　　郷土かるたをご存じの方、いらっしゃいますか。

柴原委員　　子供が小学校でやりました。

石上委員長　　県外の間は全然知らないのですけれども、埼玉県の中でも、それをしっかり使っている地域と使っていない地域があって、若干ばらつきがあるのです。でも、ある時期はみんなやって、多分、全国区だろうと埼玉の子どもたちは思っていたぐらいの時期があるらしいのです。あのようなものも大切かもしれないですね。

大久保委員　　資料4で、政令都市の文化振興イベントが7例ほど挙げられていますが、私としては3つに分けられる気がしたのです。1つめが、ヨコハマトリエンナーレ、神戸ビエンナーレ、福岡アジアマンスのグループ。先ほどおかべ委員が港とおっしゃったように、国際性を持ち国際的に発信力のあるということと、もう一つ、アートという視点からまとめ上げているという点、大規模で、かつ、イベント性が高いということです。市民の活動支援ということではなく、アートプロデューサーが大々的なプロデュースをし、スポンサーをつけて、それなりの予算を組み込んで行われているものであると

いうことと、繰り返しになりますが、アートという視点から考えている。

2つめの分類は、新潟市の水と土の芸術祭と岡山市芸術祭。これは、最初のグループがカタカナの名前であったのと対照的に、「芸術祭」という言い方をしています。「アート」と「芸術」とは、英語で言ってしまうと同じですが、カタカナで言う「アート」と漢字で書く「芸術」とは、現代日本では明らかに使い分けられていると思います。「アート」というと、立体オブジェ・光のアートから、音の芸術から、あらゆる現代アート、今までの芸術の枠を外したもので入ってくるので、非常に裾野を広げることができて、何でもありと言うと変な言い方ですが、いろいろな方向性からのアプローチから、様々なイベントを実施することができる。それに対し、2つめのグループの新潟市や岡山市の例だと、市民活動を応援している。どちらかという、郷土に根づいたものを行っているというグループです。

3つめが、川崎市のアジアンフェスタ。名前としては「フェスタ」という言葉を使っており、英語で言えばフェスティバルですが、すごくお祭りの高いイベントです。一応、コリアタウンなどがあるので、アジアというふうに結びつけています。川崎は、横浜と東京に挟まれていて、それほど情報発信力のあるところとは言いがたかったと思います。イベントとしてかなり成功を収めたのは、美術館などの施設を使うのではなく、駅ビルや商店街など、全部、川崎駅周辺の商業施設とコラボしたことによると思います。例えば、川崎アゼリアは駅からデパートに続く地下街、川崎BEというのもルミネみたいな駅ビルで、いさご通りや銀柳街は昔ながらの商店街です。これらは市役所に続く駅前の商店街で、ここに経営戦略、商業戦略というものを大いに取り入れて成功したという点で、一つ、別のカテゴリーといえるのではないかと思います。

まず、どのグループに属するかたちでさいたま市はやっていきたいのか、今、行われている市民文化祭をもう少し大々的に行いたいのか、それとも、横浜のトリエンナーレのように国際的な発信力を持ったものなのか、それとも特色が川崎に似ているので、商業施設とコラボした形でやっていくのも一つの方法だと思います。お金がかなり動きますし、こうした方向性、どのくらいのスケジュールで、どういうコンセプトでやっていくか、全体的なプロデュースをしていくのか、というような視点から考えていくことも一つ方法ではないかと考えています。

石上委員長 ありがとうございます。今ご指摘いただいたところで、例えば時間的なことなど、事務局から、イメージをご説明いただいたほうがいいかと思います。

事務局 その点につきましては、現在、検討中です。私どもといたしましても、議会等で問われた際、例えば横浜トリエンナーレ、神戸ビエンナーレのようなものを開催したいという程度のご説明をしている段階でございます。今後、意見交換会、審議会などでご意見をいただきながら検討を進めていきたいと考えています。

事務局 今、ご説明をしたとおり、議会等での答弁では、やはり予算の問題がかなりあがってくると思います。政策的な問題も関わってきますので、通るかどうかわからないですが、ただ、何億ということでの予算要求をしていきたいというふうにお答えしています。以前、「咲いたまつり」という市としての大きな事業をやっており、億単位での予算を使っていたのですが、平成21年度で終了しております。そういったところを考えると、大きな事業も実現できるのではないかと考えています。

また、本年度から、地域の祭ではない、新たな視点に立ったアートフェスティバル

を、地域の皆さんを中心に盛り上げていただきたいと考え、まだまだ小さい事業ですが、文化団体等をコアとして種をまく取り組みを行っています。なかなかむずかしいものですが、来年に向けても進めたいと考えています。そういった周辺事業と、シンボリックな事業をコラボするかどうか、そういったところもあわせて考えられたらありがたいと思います。また、地域の伝統的な祭と現代的なアートの祭などをシンボル事業としてどのように展開していくのかという点が、まだまだ私どものほうでは考えられていないところです。こういった点について、皆様からいろいろなご意見をいただけたらというのが今回の意見交換会の一つのテーマでもありますので、よろしくお願いします。

柴原委員　　いま期間の話が出ましたが、多分、埼玉県は、まだ、JRのディスティネーションキャンペーンをやっていないですよ。いろいろな地域のお祭というのも、年間通して本当にばらばらな時期の開催。例えば川崎のアジア交流祭を見ると2日間しかやっていないが、それよりも、例えばディスティネーションキャンペーンとくっつけて1年間やって、そういう地域の自主的な事業も、さいたま〇〇フェスティバルというシンボル事業の認定事業のような感じを与えることによって、年間通してやるということも一つの案かなというふうに思いますね。

石上委員長　　観光という視点から今日の議論をみると、どうですか。

花田委員　　観光として見ると、さいたま市に人を持ってくるという話がありますが、素材がないという状況。アンケートにも出ていましたが、ハードは非常に充実をしている。自分は神奈川県出身で、今はさいたまで働いていますが、交通の便がいいのでいつでも行けるということは、逆に言うと、わざわざ行かなくてもいいと、神奈川に住んでいるときは思っていました。ハードはできていても、ソフトがなかったりするので、なかなか誘客という関係では厳しい。いろいろな芸術祭を私どもで扱っていますが、やはり、わざわざ行きたくなるものに求められているのはリアル感で、とってつけたようなイベントをしてもなかなか持続性がなかったりします。そういう意味では、各委員から出ていたように、今あるものを発掘して今風に磨き上げていくことが、一番求められているのかなと思います。良いものがあっても、それがなかなか発信されていなかったり、知られていなかったりということもある。風の盆のように、八尾町でやっていたものが口伝えで広まり、いずれは何十万人が訪れるイベントになっていくという流れだと思います。やはり本物感とか、いかにハードをソフトに結ぶのかというのが大事かなと思います。

石上委員長　　五十嵐委員に伺いたいのですが、鉄道博物館というのはできたばかりなのに、コアとなるイメージみたいなものがすでにあるような気がするのですけれども、その辺というのはどのようにお考えですか。以前、秋葉原にあった交通博物館が移ったわけですよ。やはり週2回もNHKに取り上げられるというのは、行こうという何かがあるわけですよ。

五十嵐委員　　この10月14日で開館5周年を迎えたわけですが、最初、できたときは、ブーム的な感じで、異常な盛り上がりでした。けれども、だんだん落ちついてきてはいます。やはり、鉄道というのは人気があるのですかね。結構、女性のお客様がいらっ

しゃって、それは交通博物館時代には見られなかったことです。女性の中でも鉄道が好きな人がいらっしゃるのですけれども、今までは表であまり言えないような感じでしたが、それが今は堂々と言えるような風潮になりました。あと、カップルでいらっしゃる方も多いですし、年配のグループもいらっしゃいます。

齊藤委員 鉄道のファンというのは全国にいて、核をつくることに成功したのです。ですから、あそこを目指していくといろいろなイベントがあって、コアなというか、すごく鉄道を掘り下げた人の何かが展示されていたり、いろいろな鉄道ファンが多くいるのです。美術館でもそうですが、あそこでいろいろな企画の展示があると、それは発信されているものですから、全国からそういう人たちがそれを見に集まってくるだけの核になり得るものできてしまっていると思いますね。

石上委員長 そういうヘビーな人にも対応して、子供も好きだし、年寄りも行くし、カップルでも行けるといってすべてに関係するということですね。

齊藤委員 先ほど申し上げたように、ハードもおしなべてこの125万の市内にいっぱいあって、文化芸術活動もやられていて、それからさいたま芸術劇場みたいな非常に深いところにも取り組んできている。最初、諸井さんが館長で、諸井さんの発想で現代舞踊を取り上げた。実を言うと、さいたま市、埼玉県の人にとって、とっつきにくい世界だったのです。さいたま芸術劇場でも、きっと3カ月に1度ぐらいランチタイムコンサートを実施しているが、もう少し持続的に行えるとよいと思います。

もう一つは、やはりある種のパンチ力がある、人を集める、人を動かすというものも必要。例えば、今やっている市民文化祭などをもう一度再構築をしてもいいと思うのです。今、「のぼうの城」という映画を宣伝していますが、あの忍城は行田市にあり、あのようなイベントが1つあると、「あの忍城というのは埼玉のどこか片田舎のお城だったんだな」というのを再認識する。僕もこの間、行田に行ってきましたが、「忍城に行くのにどう行ったらいいんだ」と、普通の人が質問していました。今までは誰も行こうとも思わなかったと思うのですが、発信力のあるイベントを実施することによって、そこに認知度、集中度が高まります。おしなべてやる部分、今まで継続的に積み上げてきてもう成功している部分と、それからもう一つは核となり発信するものを何か一つそこに持つてくることによって、うまく全体を融合できれば、それを柱にしてつくっていくことができるのかなと思います。

山口委員 前回、世界合唱祭というのが京都で行われたというお話をしました。世界というのでなくても、浦和市から始まって、さいたま市は非常に合唱が盛んです。埼玉の合唱の集い、浦和の合唱の集いなど前身があり、それらは宝であろうと思います。というのは、浦和市ではだめだったのですが、さいたま市になったことによって、全国レベルで、高校合唱コンクールの受賞校が多々あります。優勝校を主として抱えているさいたま市で開催してはいけないでしょうかという話もあります。浦和一女で賞品のグランドピアノを何台も持っているなど、ある意味、そういった学校がたくさんあるというのは宝です。それから、小中学校でも合唱コンクールが毎年行われていますし、中学高校でも、合唱コンクールの伴奏をする、子供がピアノを弾くというと、親御さんも相当な勢いで参加する。それから、公民館も大変利用が多く、常時、合唱が入っていて、熟年の合唱団が大変多いので、なかなか場所が取れない。こうした地に根ざ

した合唱を大きな規模で開催するのは、比較的、コストがかかりません。地元でできるもの、例えば優勝校の模範演奏や、吹奏楽で金賞を取った学校の演奏、小中学校の合唱団などにより規模を大きくすることは、コストの上ではよろしいのではないかと思います。

それから、私個人としては、前回からの宿題ということで、さいたま市のことを広くて本当に知らなかったものですから、鉄道博物館、盆栽村、漫画会館などを巡り歩いてきました。NACK5も聞かせていただきました。盆栽美術館ではコンサートもされているんですけども、例えば、合唱とか地域の活動を地味に行うのではなくて、地域を会場にして、何千人もがコーラスをしてしまうようなエネルギー、いろいろな取り組みができるテリトリーであるのかなという自覚をいたしました。

石上委員長　そろそろ時間ですが、これだけは言っておきたいことなどありませんか。

村木委員　鉄道博物館が非常に注目を浴びているのは、やはり若い人たちのオタク文化が市民権を得たのだと思います。だから、アニメオタクが恥ずかしくなくなりましたし、メイド喫茶だって恥ずかしくなくなってしまうわけで、今まで、鉄ちゃんとか鉄子と言われていたのが、堂々と自分で言うようになってきた。それと同じように、盆栽でも、盆栽オタクがもしいるのだとしたら、市民権を持って堂々と出てくると、もっとPRできるような気がします。また、若い世代に少し弱い。鉄道は若い人まで来ていますし、先ほど齊藤委員が言っていた、NHKに2回も取り上げられたというのは、多分、NHKのディレクターが鉄道オタクだと思うのです。新幹線100系の東京駅での引退式は、フジテレビでも特集しましたが、やはりフジテレビにオタクがいるらしいのです。吊い鉄というらしいですが、こういう企画が必要であると言えるまでに、オタクが市民権を得たのだと思うので、今、おもしろい文化が起こっているなと思います。

石上委員長　年齢的な問題がありますよね。40代ぐらいからがオタクがカミングアウトできる世代だとか。

齊藤委員　これまで、それぞれで十分機能してきたものを無理やり結びつける必要はなくて、やはり、この議論の中では人を集めるということが求められている。公募委員の面接の際に、さいたま市に人を呼びたい、人を動かしたいというふうに市のほうでおっしゃっていたので、そうしたら、やはり芸術週間なり、ある種、核になって目立つ発信力のあるものをコアとして実施するべきだろう。それは例えば、芸術劇場で蜷川幸雄さんがゴールドシアターでもやられていますが、ベルリン・ドイツ・オペラの『マクベス』というオペラは、通常でも100人以上の合唱団が必要なのです。例えば、これを400人の合唱団で、スーパーアリーナにおいて、蜷川演出でやりますということも考えられます。忍城の話と同じですが、そういうイベント的で高い芸術性のある音楽を鑑賞したい、一流の芸術というのがアンケート結果にありますから、そのようなものをやる。あるいは、大宮は交通の要所ですから、例えば、この時期に、東北の祭を幾つか各県1個ずつ呼んで、さいたまの祭も合わせて、会場はスーパーアリーナなどどこでもいいですが、広い通りで、山車や浦和の神輿などが集まったイベントをやる。あるいはアジアの芸能を見せるなら、そういう国の人たちをこちらがお金を出して呼ぶ。単発的に国立劇場で上演されているもの、それをフェスティバルとしてさい

たま市でやるというような、ある種、核になって発信できる、人を動かすイベントを実施する。1億円ぐらいあればできるのではないか。劇場をつくるのに100億円などという話とはレベルが違う。その程度で人を動かし、人を集められる。「のぼうの城」を撮るよりもずっと安くできるだろうと思うのです。こうしたイベントを実施するというのを、この会議として発信していき、そして市にもそれを受けとめていただくとよいと思う。個々の文化活動をしている方は、どうやったら個々に磨けるか、それはまたそれぞれで築き上げていただけるといい。オペラで言いますと、コーラスの部分は公募して、各市からいろいろな合唱団に集まっていただいて、蜷川さん一流の演出で人を動かしていただいて、盛大なプロジェクトになるようなものをやるとか。美術はスタティックで、ずっと1ヶ月やっても、それなりのお客さんを集められるのですが、音楽は集中的に、例えばスーパーアリーナでやれば1万人集められる、そういう興業にする。それを核にして、周辺に祭があるようなイベントを、例えば秋のシーズンなどに1週間程度実施できるとそれは起爆剤になるかと思います。

おかべ委員　横浜、神戸のメジャーな大イベントも結構ですが、大きなイベント、オペラのイベントと、大久保さんのおっしゃった川崎系の地元の商店が頑張れるイベントとうまく融合できたら、それはすごく素敵なことだと思います。

大久保委員　やはりイベントを実施するためには、4つのことを私たちは考えていく必要があるのではないかと思います。まず、メインステージをどこにするか。資料にあるイベントの例を見ても、何かしらメインステージがある。それによって、次に続く全体のコンセプトも固まってくると思う。スーパーアリーナをメインステージにするなど、まずメインステージを考える。そして、全体のコンセプト。芸術祭の形にするのか、それとも国際的なアートの発信にするのか、そういうコンセプトと全体のサイズを考えること。あと、やはりお金がつくものですから、スポンサーを、例えば横浜のトリエンナーレでは朝日新聞社がスポンサーになっていますし、スポンサーにどこか大きい企業をつけるということが必要です。横浜の場合も、回を重ねるごとにプロデューサーがかわっていますが、アートプロデューサーの役割を担える人が必要であるという、この4つをまずきちんと決めた上で、話し合いを進めていくと有効ではないかと考えます。

石上委員長　ありがとうございます。まとめていただきました。

柴原委員　最後に一つだけ。今回のテーマにも書いてありますが、全国に発信していくということと、市民等の皆様方の積極的な参加が不可欠というふうにあります。やはりこのシンボル事業をやるにあたって大事なものは、市長や区長、各施設の館長、教育委員会などが同じ方向を向いて、積極的に盛り上げて、それを受けて市民たちもやはりみんなで盛り上げましょうと、同じ方向に向くということをお願いする必要があります。

宮本委員　それとともに、時期や時間帯、曜日などは、誰を対象にするのかで大分違ってきます。多くの市民が参加できれば、活性化される。とても大きなポイントだと思います。

村木委員　　今まで皆さんがおっしゃったディスティネーションキャンペーン、交通の便が良すぎる、いつでも行けるから行かない、オタクが市民権を得てきた、果たしてメインステージが必要か、さいたま市に人を呼びたいなどということを総合して考えたら、いろいろな場所に行くスタンプラリーのようなイベントが一番手っとり早いのかなと思ったのです。JTBなどが組みそうな企画ではあると思うのですが、この期間中にいろいろなところでスタンプラリーをやって、地元の人にも見てもらいつつ、地方からも呼んで、キャンペーンして、得点が得られるのかどうかわかりませんが、それならあまりコストがかからないでできるのかなと、民間の企業っぽい考え方でありますが、一応、最後に申し上げます。

三須委員　　ちょっと投げかけの意味でお話ししますと、今、行田が「のぼうの城」ですごく盛り上がっていて、経済の活性化にもつながりそうだということで動いています。文化芸術を核にするだけではなくて、例えば、市長がこの間、国際自転車競技大会を誘致するという話をされていましたが、実現すれば、すごいイベントになります。さいたま市は環境未来都市の実現を目指しているし、環境と経済と文化が融合するような形で、例えばさっきの盆栽美術館と漫画会館をレンタサイクルでつなぐとか、浦和駅のリニューアルにみんなが注目しているタイミングをうまく使うというのもいいかと思えます。

宮本委員　　スポーツのほうは、うまくいきそうな感じはしますね。

石上委員長　　ありがとうございました。そろそろ時間なので。

事務局　　先ほど齊藤委員から、市内の宿泊可能客数の話がありました。調べましたら、平成21年時点で、31施設で3,422人（参考：平成24年29施設3,339人）という数字が出ておりました。ただし、これは中小の施設を含めての数字です。

石上委員長　　やはり、いろいろなアイデアはあるにしても、コアとなるイメージが一番弱いのだな、そこが最後までボヤッとしたままだったというのが、今日の印象でした。だから、こういう場や他のいろいろな場で、コアとなるイメージをどうつくっていくかということが、多分、今後の課題になっていくと思います。

　　以上で議長の職を下ろさせていただきたいと思います。ご協力ありがとうございました。